

曹植の文学と西晋時代の人々

——西晋王朝における曹植「野田黄雀行」演奏の意味——

県立広島大学 柳川順子

西晋王朝の宮廷歌曲群「大曲」の中の一曲に、曹植の樂府詩「箜篌引」を、別の歌曲「野田黄雀行」のメロディにのせて歌うというものがある。では、「大曲」の編者はなぜ、数ある曹植作品の中からこの樂府詩を選び取り、それを「野田黄雀行」の樂曲で歌うよう指示したのだろうか。本発表はこの問いを糸口として、西晋王朝の宮中で、曹植の「置酒・野田黄雀行」が演奏されたことの意味を探ろうとするものである。

一、晋樂所奏「野田黄雀行」と「贈丁翼」詩

① 晋樂所奏「置酒・野田黄雀行」（『宋書』樂志三）

- | | |
|-----------------|----------------------------------|
| 01 置酒高殿上 | 立派な御殿の上に酒席を設け、 |
| 02 親交従我遊 | 親しい友人たちが私に従って宴に遊ぶ。 |
| 03 <u>中廚辦豊膳</u> | 厨房の中では料理人たちが豊かな食膳を準備して、 |
| 04 烹羊宰肥牛 | 羊肉を煮たり、肥えた牛をさばいたりしている。 |
| 05 <u>秦箏何慷慨</u> | 秦の箏のなんと激しい感情を歌い上げていることか。 |
| 06 <u>齊瑟和且柔</u> | 一方、齊の瑟は和やかで柔らかな音色を奏でている。」一解 |
| 07 陽阿奏奇舞 | 陽阿の町からは素晴らしい舞が献上され、 |
| 08 京洛出名謳 | 洛陽の都からは名人の歌が選出される。 |
| 09 樂飲過三爵 | 楽しみを尽くして重ねた酒杯は三酌を超え、 |
| 10 緩帶傾庶羞 | 帯を緩めて多彩な美味の皿を平らげる。 |
| 11 主称千金寿 | 主人は賓客に向かって値千金の長寿を祝福し、 |
| 12 賓奉万年酬 | 客は主人に万年の繁栄を称えて返杯を奉る。」二解 |
| 13 <u>久要不可忘</u> | 昔の約束は忘れてはならないし、 |
| 14 <u>薄終義所尤</u> | 最後になって薄情な待遇をするのは道義として咎められるべきことだ。 |
| 15 <u>謙謙君子徳</u> | 謙譲は君子の美德ではあるけれど、 |
| 16 <u>磬折欲何求</u> | 磬のごとく腰を折り曲げて何を求めようというのか。 |
| 17 盛時不再来 | 意気盛んな時は再び巡ってくることはないし、 |
| 18 百年忽我遄 | 百年という時はあっという間に私の中で尽きてしまう。」三解 |
| 19 驚風飄白日 | 突風が白く輝く太陽を翻し、 |
| 20 光景馳西流 | 時の光は西方へ飛び去ってゆく。 |
| 21 生存華屋処 | 生きているときに華やかな御殿で暮らしていても、 |
| 22 零落歸山丘 | 死んでしまえば魂は山へ帰るのだ。 |
| 23 先民誰不死 | 先人で誰が死ななかった者がいるだろう。 |
| 24 知命復何憂 | 天与の運命を知れば、いったい何を憂えることがあろうか。」四解 |

- * この楽府題の下にいう「空侯引、亦用此曲」から、一般には「箜篌引」として知られている曹植の歌辞が、「野田黄雀行」の楽曲を用いて歌われることがある、と認識されていたことが知られる。
- * 本辞「箜篌引」との異同：17・18「盛時不再来、百年忽我適」と、19・20「驚風飄白日、光景馳西流」とが、「箜篌引」（『文選』巻27）では入れ替わっている。

② 曹植「贈丁翼（丁翼に贈る）」（『文選』巻24）

- | | |
|----------|--------------------------------|
| 01 嘉賓填城闕 | 立派な賓客たちが宮殿を埋め尽くし、 |
| 02 豊膳出中厨 | 厨房の中からは素晴らしい食膳が運び出されている。 |
| 03 吾与二三子 | 私は気心知れた二三の友人たちと、 |
| 04 曲宴此城隅 | この宮城の片隅で内輪の酒宴を設ける。」 |
| 05 秦箏弄西氣 | 秦の箏は西方の音色を華やかに奏で、 |
| 06 齐瑟扬东謳 | 齐の瑟は東方の国ぶりの歌を盛り上げる。 |
| 07 肴来不虚帰 | 酒の肴が出てくれば、手つかずで帰すことはなく、 |
| 08 觴至反無餘 | 酒杯がめぐってくれば、すっかり飲み干して返礼する。」 |
| 09 我豈狎異人 | 私はどうして赤の他人に馴れ親しんだりするものか。 |
| 10 朋友与我俱 | 古なじみの友人たちが私と共にいるのだ。 |
| 11 大国多良材 | 大国には良き人材が多く現れ、 |
| 12 譬海出明珠 | それはさながら海が真珠を生み出すようなものだ。」 |
| 13 君子義休侍 | 君子は人として踏み行ふべき義を体得し、 |
| 14 小人徳無儲 | 小人は徳をじっくりと内に蓄えるということがない。 |
| 15 積善有餘慶 | 善行を積みば必ず余沢に恵まれるもので、 |
| 16 栄枯立可須 | 栄枯盛衰はたちどころにしかるべきところへ落ち着くはずだ。」 |
| 17 滔蕩固大節 | ゆったりとした精神を保ってこそ、大いなる節義に合致するのに、 |
| 18 世俗多所拘 | 世俗の者たちは些事に拘泥しすぎる。 |
| 19 君子通大道 | 君子は大道に通じているものだ。 |
| 20 無願為世儒 | 俗っぽい儒者になろうなどと願ってはならぬ。」 |

➤ ①「置酒・野田黄雀行」と②「贈丁翼」詩との共通点

- ①-03「中厨辦豊膳」 ～ ②-02「豊膳出中厨」
- ①-05「秦箏」06「齐瑟」 ～ ②-05「秦箏」06「齐瑟」
- 内容面として、宴席を共にする友人の存在を大きく取り上げ、その友人に語りかける言葉を詩中に織り込んでいるという点で共通。

➤ 両作品の特徴的表現が意味するところ

- ①-13～「久要不可忘、薄終義所尤。謙謙君子徳、磬折欲何求」
 - ・「久要」とは、年来の約束。『論語』憲問に「見利思義、見危授命、久要不忘平生之言、亦可以為成人矣」と。「薄終」は、交遊の最終局面で薄情になること。『列子』力命に「厚之於始、或薄之於終（始めに厚く、或いは終はりに薄し）」と。
 - ・これらの古典語を用いて、以前に交わした約束は必ず守ると言明している。その約束とは、相手の求める官職が得られるよう取り計らうこと。ⁱ

- ・「謙謙君子徳」は、やたらとへりくだる相手の態度を、『易』謙卦・初六の象伝にいう「謙謙君子」をそのまま用いて大仰に表現したもの。「磬折」は、楽器の磬のごとく腰を折り曲げて有力者に従うさまを、『尚書大伝』に出る語を用いて形容。こうした表現は、相手をからかうような、戯れの調子を帯びている。

e. ②-03～「吾与二三子、曲宴此城隅」

- ・「二三子」は、親密な友人。『論語』述而に「子曰、二三子、以我為隱乎。吾無隱乎爾。吾無所行而不与二三子者、是丘也」と。ここでは、本詩が贈られた丁翼やその兄の丁儀らを指す。
- ・彼らが集う「曲宴」は、宮中での私的な宴。⇔01「嘉賓填城闕」

f. ②-09～「我豈狎異人、朋友与我俱」

- ・『毛詩』小雅「頍弁」にいう「爾酒既旨、爾殽既嘉。豈伊異人、兄弟匪他」を踏まえつつねじったもので、ここで宴席を共にしているのは「兄弟」ならぬ「朋友」であると強調。
- ・この句の後に相手に対する激励と訓戒の言葉が続く。

- ①「置酒・野田黄雀行」と②「贈丁翼」詩とは、友人への語りかけ方に質感の違いがあるが、両詩は強い類似性で結ばれている。晋楽所奏「置酒・野田黄雀行」（本辞は「箜篌引」）は、曹植と丁氏兄弟との関係を彷彿とさせる歌曲であったと見ることができる。

二、もうひとつの曹植「野田黄雀行」

- 晋楽所奏「置酒・野田黄雀行」を載せる楽曲「野田黄雀行」

- g. 『楽府詩集』巻39・瑟調曲「野田黄雀行」引（陳・釈智匠）『古今樂録』；（劉宋）王僧虔「技録」有「野田黄雀行」、今不歌。

- h. （北宋末）郭茂倩；按漢鼓吹饒歌亦有「黄雀行」、不知与此同否。

* 郭茂倩のいう「黄雀行」は、『宋書』樂志四所収「漢鼓吹饒歌十八曲」の「艾如張曲」か。その歌辞に「山出黄雀亦有羅、雀以高飛奈雀何」と。ただ、「野田黄雀行」との関係は未詳。

③ 曹植「野田黄雀行」（『楽府詩集』巻39）

- | | |
|-----------------|--|
| 01 高樹多悲風 | 高い樹木に悲しげな風がひどく吹き付け、 |
| 02 海水揚其波 | 海水はその波を巻き上げる。 |
| 03 <u>利劍不在掌</u> | 鋭い劍がこの手の中にない以上、 |
| 04 結友何須多 | 交友関係を結んでも、私にどうして多くを求められよう。 ⁱⁱ |
| 05 不見籬間雀 | 見よ、籬（まがき）の間にいた雀は、 |
| 06 見鷁自投羅 | ハイタカを見ると自ら網羅の中に身を投じた。」 |
| 07 羅家得雀喜 | 網を仕掛けた人は雀を捕獲して喜び、 |
| 08 少年見雀悲 | 若者は雀を見て悲しむ。 |
| 09 <u>拔劍捎羅網</u> | 劍を抜いて網羅を切り払うと、 |
| 10 黄雀得飛飛 | 黄雀は羽ばたくことができるようになった。」 |
| 11 飛飛摩蒼天 | 羽ばたいて羽ばたいて青い空に届かんばかりになったかと思うと、 |
| 12 来下謝少年 | 飛び下ってきて若者に謝意を告げた。」 |

➤ 03「利劍不在掌」と09「拔劍捎羅網」とをめぐる解釈

- i. 「劍」が自身の手中には無いと告げる前半に対して、それを用いて窮地に追い込まれた者を救い出せたと詠ずる後半は、現実には腹心の友を救えなかった詩人の仮構と見る説あり。ⁱⁱⁱ
- j. 前後の劍を別ものと捉え、詩人は友の救済を、自身とは別の有力者に託したと見る説あり。^{iv}
- k. 清朝の朱乾『樂府正義』巻8に①「置酒・野田黄雀行」に続けて③「野田黄雀行」を収載し、次のように述べる。

自悲友朋在難、無力援求而作。猶前詩久要不可忘四句意也。前以望諸人、此以責諸己。風波以喻險患、利劍以喻濟難之權。

自ら 友朋の難に在るも、求めを援くるに力無きを悲しみて作る。猶ほ前詩の「久要不可忘」四句の意のごときなり。前(①「置酒・野田黄雀行」)は以て諸を人に望めども、此(③「高樹・野田黄雀行」)は以て諸を己に責む。「風」「波」は以て險患に喩へ、「利劍」は以て難を済ふの權に喩ふ。

- ①「置酒・野田黄雀行」は、宴席で腹心の友に将来を約束する言葉をかける、という内容をもつ。この歌辞が、②「贈丁翼」との間に多くの共通点を持つことから、①に登場する腹心の友は、丁儀・丁翼兄弟だと見ることができよう。
- ①「置酒・野田黄雀行」をのせる楽曲は、③「野田黄雀行」の歌辞を真っ先に想起させただろう。それは、腹心の友を救うことができなかった非力な自身を責める歌であった。
- 晋樂所奏「大曲」に組み入れられた①「置酒・野田黄雀行」は、これを聞く人々に、賑やかな宴の情景を思い浮かべつつ、それに重ねて、かの宴に集っていた者たちの悲惨な末路と曹植の絶望を、否応なく想起するよう求めることとなる。

三、晋樂所奏「野田黄雀行」の背景

➤ 丁氏兄弟の事績

- 1. 『魏志』陳思王植伝；

植既以才見異、而丁儀・丁廙・楊修等為之羽翼。太祖狐疑、幾為太子者数矣。……文帝即王位、誅丁儀・丁廙并其男口。植与諸侯並就国。

植 既に才を以て異とせられ、而して丁儀・丁廙(丁翼に同じ。以下同様)・楊修等 之が羽翼と為る。太祖(曹操)は狐疑し、幾ど太子と為さんこと数なり。……文帝(曹丕)王位に即きて、丁儀・丁廙並びに其の男口を誅す。植は諸侯と並びて国に就く。

* 同伝裴松之注引『魏略』は、彼らの父丁冲が曹操の古馴染みで、その献帝奉戴に助力があったこと、曹操はかつて丁儀を愛娘の婿に迎えようとしたが、曹丕の疑義により沙汰やみとなったこと、処刑を前にした丁儀が曹丕の昵懇である夏侯尚に命乞いをしたことを記し、同裴注引『文士伝』は、丁翼が曹操に、曹植の優秀さを言葉巧みに説いたことを記す。

- m. 『魏志』巻22・桓階伝；

時太子未定、而臨菑侯植有寵。階数陳文帝德優齒長、宜為儲副、公規密諫、前後懇至。又毛玠・徐奕以剛蹇少党、而為西曹掾丁儀所不善。儀屢言其短、賴階左右以自全保。

時に太子未だ定まらず、而して臨菑侯植 寵有り。階は数 文帝の徳優れ^{よほひ}齒長ずれば、宜しく儲副と為すべきを陳べ、公けに^{ただ}規し密かに諫め、前後に懇至たり。又毛玠・徐奕は剛蹇なるを以て党少なく、而して西曹掾丁儀の善くせざる所と為る。儀は^{しばしば}屢其の短を言ふも、階が左右するに頼みて以て自ら全保す。

n. 『魏志』卷 12・徐奕伝；

丁儀等見寵於時、並害之、而奕終不為動。

丁儀等は時に寵せられ、並びに之を害するも、奕は終に為に動かず。

o. 『魏志』卷 12・何夔伝裴注引『魏書』；

(傳異なる人物が何夔に対して助言) 儀不相好已甚、子友毛玠、玠等儀已害之矣。

儀は相好からざること已に甚し、子は毛玠を友とせるが、玠等も儀は已に之を害せり。

(何夔が傳異なるに答えて) 為不義適足害其身、焉能害人。且懷姦佞之心、立於明朝、其得久乎。

不義を為さば適に其の身を害するに足る、焉んぞ能く人を害せんや。且つ姦佞の心を懷きて、明朝に立たば、其れ久しきを得んや。

p. 前掲徐奕伝裴注引『傳子』；

武皇帝、至明也。崔琰・徐奕、一時清賢、皆以忠信顯於魏朝。丁儀聞之、徐奕失位而崔琰被誅。

武皇帝(曹操)は、至って明なり。崔琰・徐奕は、一時の清賢にして、皆忠信を以て魏朝に顯はる。丁儀は之を聞て、徐奕は位を失ひ而して崔琰は誅せらる。

* 崔琰は、その書簡の字句をある者に捻じ曲げられ、それがもとで曹操の怒りを買って死を賜ることとなった(『魏志』卷 12・崔琰伝)。前掲『傳子』によれば、この流言飛語の張本人こそ、かの丁儀であった。

* 『傳子』の著者は、隣接する時代の傳玄(217—278)であり、その父の傳幹は、曹操の幕下で參軍や丞相倉曹属を務めている(『魏志』卷 1・武帝紀裴注引『九州春秋』)。

- ②「贈丁翼」詩における曹植の丁氏兄弟に対する姿勢
- 丁氏兄弟の所業を踏まえた上で作られた③「野田黃雀行」
- この悲嘆を詠う歌曲③のメロディに乗せて歌われる①「置酒・野田黃雀行」

四、「大曲」の編者と晋樂所奏「野田黃雀行」

- 晋樂所奏「清商三調」は、西晋の荀勗によって選定された(『宋書』樂志三)。
- 「大曲」は、「清商三調」の成立後、荀勗と同時代の張華が編成したと見るのが妥当である。^v
 - ・ 荀勗の編んだ歌辭録「荀氏録」が、晋樂所奏「清商三調」とほとんど一致する一方、「大曲」とは、一篇の例外を除いて全く重なり合わない。その一篇の例外「艷歌羅敷行」を、「荀氏録」は瑟調曲として記し、それが「大曲」として演奏されることに言及していない。
 - ・ 西晋の初め、武帝司馬炎は佞臣たちにそそのかされて、弟の司馬攸を王朝の中樞から排斥し、彼を憤死に至らしめたが、その首謀者は荀勗である。一方、張華は司馬攸の明德を高く評価し、それがために荀勗によって遠隔地に飛ばされたという経歴を持つ。^{vi}
 - ・ 西晋王朝の人々にとって、司馬炎の司馬攸追放は、前王朝の、魏の文帝曹丕による曹植の冷遇を想起させるものであった。すると、荀勗が曹植作品を宮廷音楽の歌辭として採用するとは考えにくい一方(「清商三調」に曹植の歌辭は無し)、張華にはそれを行う動機があったと言える。

むすび

晋楽所奏「大曲」の中的一篇「置酒・野田黄雀行」は、曹植の宴の歌「箏篴引」を本辞として、これを、同じ曹植の歌辞で知られる「野田黄雀行」の楽曲に乗せるよう指定するものであった。その「大曲」の編成者と目される張華の意図は、すでにここに明らかとなったと言ってよいだろう。張華は何よりもまず、この歌曲を取り上げることによって、魏王国の後継者争いをめぐる曹植の悲劇と彼の無念を掬い上げようとした。そして、この歌曲が西晋王朝の宴席で歌われることによって、朝堂に会した人々の間に、曹植の人柄を偲び、その不運なめぐり合わせを追悼する思いが広がっていくであろうことを期待した。かくして張華は、「大曲」の中にこの「置酒・野田黄雀行」を組み入れたのではなかったか。

-
- ⁱ 後漢初頭以来、支配者階級の主催する宴席は知識人たちの求職活動の場でもあって、たとえば古詩「今日良宴会」（『文選』巻 29）には、このことが顕著に見て取れる。
 - ⁱⁱ この句を、交友関係は必ずしも多い必要はない、と捉える先行研究もある。たとえば、伊藤正文『曹植（中国詩人選集 3）』（岩波書店、1958 年）p.157—159。
 - ⁱⁱⁱ 大上正美『思索と詠懐（中国古典詩聚花）』（小学館、1985 年）p.27—29 を参照。これと同じ方向で解釈するのは、曹海東『新訳曹子建集』（三民書局、2003 年）p.242—244 である。
 - ^{iv} 余冠英「建安詩人代表曹植」（『漢魏六朝詩論叢』棠棣出版社、1952 年）p.99、黄節『曹子建詩註』（中華書局、1973 年）p.99、趙幼文『曹植集校注』（人民文学出版社、1984 年）p.207 を参照。
 - ^v 拙論「晋楽所奏「大曲」の編者」（『九州中国学会報』第 62 巻、2024 年）を参照されたい。
 - ^{vi} 福原啓郎『西晋の武帝 司馬炎（中国歴史人物選 3）』（白帝社、1995 年）p.170—180 を参照。